

2022 年度聖路加国際大学大学院看護学研究科  
修士論文

職場いじめを目撃した看護師のいじめをめぐる行動プロセス

—M-GTA を用いた質的分析を通して—

Behavioral Process of Nurses Who Witness Workplace Bullying.

—Qualitative Investigation by M-GTA—

21MN014

氏名 楠圭祐

## 要旨

### 【目的】

看護の現場における、「職場いじめの目撃者」の、いじめをめぐる行動プロセスを明らかにし、いじめ目撃者行動の説明モデルを生成することを目的とした。

### 【方法】

修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下 M-GTA)を用いた質的研究で、研究対象は、自身の所属部署内で、過去にいじめと感じた行為を直接目撃した者、あるいは、いじめと感じた行為を何らかの手段で認知し、かつ、いじめを目撃または認知したときに管理的立場にいない看護師を対象とした。半構造的面接を実施し、分析は M-GTA(木下, 2020)に準拠して行い、聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した。(承認番号: 22-A009)

### 【結果】

研究対象者は8名で、面接時間は平均62分であった。分析の結果、32概念、2サブカテゴリー、12カテゴリー、2中心的カテゴリーが抽出された。職場いじめを認識した看護師のいじめをめぐる行動プロセスは、【不安定な善悪判断】といった、個人の精神領域における職場いじめ事象に対する価値判断と、【自己安全な解決策の模索】といった現実対応領域の関係性の中でバランスをとりつつ行動を選択することであると示された。具体的には、現実対応領域において、[自己防衛欲]や「部署外資源の活用困難」「発言への非容認感」などの『ハイリスク感』を強く感じるときは、目撃者は加害者に対して消極的な行動である『傍観』を選択する傾向にある。一方で、[後押しされる環境]による「後ろ盾の確認」や「発言への容認感」を感じたり、目撃者自身の「成功事例の想起」や「捨身の覚悟」を持っており、『対応可能性』を感じる場合は、加害者に対する積極的な行動である『加害者への接近』を選択傾向にある。そして、【不安定な善悪判断】において「被害者への同情」や「加害行動に対する納得感」をどの程度感じているかに応じて行動意欲は変化する。また、『被害者への接近』に関しては、【自己安全な解決策の模索】との兼ね合いで、行動の範囲を規定していることが明らかになった。本理論において、【不安定な善悪判断】の価値判断における『看護師であること』及び、【自己安全な解決策の模索】における『対応可能性』と『ハイリスク感』の捉え方がプロセスの重要な転換点であることが示された。また、『看護師であること』といった集団規範による道徳的判断を含むが、看護師の職場いじめ目撃者の価値判断の特徴であった。

### 【結論】

本研究で明らかになった職場いじめを認識した看護師のいじめをめぐる行動プロセスは、“管理者、使用者（企業や組織）の立場”と“職場いじめ目撃者である従業員の立場”による具体的な理論の実践的活用を提示することで、職場いじめを認識した看護師の職場いじめをめぐる行動を促進・支援する看護管理実践、及び、ハラスメント・いじめのない職場づくりに必要な取り組みについての示唆が得られた。